



東洋絵画の写実力—李公麟「五馬図巻」

伊藤 大輔（美学美術史学）

この記事が出る頃にはもう大分経ってしまっているかもしれませんが、明けましておめでとうございます。2014年は午年ですね。東洋では馬を描く画馬というジャンルが古くからありました。

私の個人的な考えですが、東洋絵画で最も美しい作品の一つがこの画馬のジャンルには存在するように思います。それは北宋の文人である李公麟という画家が描いた「五馬図巻」です。李公麟は、線描だけで馬や人物を描く白描画の名手で、対象を実在感豊かに再現するために、あらゆる線質を使い分けてそれに肉迫しました。「五馬図巻」には、当時の宮廷に西域から献じられた五頭の馬とそれを御する圉人といわれる人物が描かれているのです

が、馬を描くに際しては、やや肉の薄い背中、肌のはった尻、少し柔らかい腹、筋肉が盛り上がった胸、ふさふさとした尾、流れるたてがみなどが、それぞれの質感に合うように時に細く硬質な、時に柔らかい抑揚のある息の長い線が引かれています。また、圉人が手に引く綱もいかにもそれらしく再現されています。そうした細部にも一切の手抜きがありません。そこでは各々の線が、単に描写対象の再現に奉仕するだけでなく、白い紙の上に引かれた墨の線それ自体として抽象的な美を引き出されているのです。対象再現と線描の美が両立した東洋の写実絵画の極みと言えるでしょう。その神業故に、五頭目の馬は、李公麟が写した直後に死んでしまったとされ、いつしか五頭目のみ後世の補作に代えられたとされています。

残念なことに私はこの「五馬図巻」を見たことはありません。戦前日本に伝来していたのですが、第二次世界大戦の混乱の中で行方不明になったとされています。現在では、紛失前に作られたコロタイプという高精細印刷によってしかその全貌をうかがうことは出来ません。しかし、いまだにどこかに秘蔵されているという噂も絶えないミステリアスな作品です。いつか再出現してくれることを望んでいます。

著作権の関係から、写真を掲載しておりません。
ご了承ください。

李公麟筆「五馬図巻」巻頭

研究室紹介—File03

フランス文学に魅せられて

研究室名：フランス文学第一研究室

フランス文学第一研究室では、文字通りフランスの文学について研究しております。研究室教授である松澤和宏教授は19世紀のフランス作家、ギュスターヴ・フローベールおよび言語学者・哲学者であるフェルディナン・ド・ソシュールを専攻されています。また授業では、さまざまな時代の作家の作品を講読しています。作品を精読することで、作家がその作品に込めた思いや考え方が、ひしひしと伝わってきます。それはまるで、作家がわれわれに直接語りかけてくるといっ



研究室合宿のひとこま

たところでしょうか。

さらに、勉強だけではなく、年に一度、日ごろの研究の疲れを癒すため夏に避暑地へ研究室合宿に行っています（写真を御覧下さい）。川のせせらぎや木々のささやきに耳を澄ませていると、心の奥底から生まれ変わったような気がします。文章と向き合うだけではなく、自然とも対峙し、その圧倒的なまでの生命力を全身に感じられる、非常に有意義な時間を過ごすことができます。

フランス語に魅せられた生徒の中には、実際に本場フランスへ旅行をしたり、留学に行く人もいます。フランスの文化は日本のそれとは違ったところがたくさんあり、戸惑ってしまうことも何度かあります。しかしその経験はフランス文学を学ぶ上でとても意義あるものであると思える日がきっと来ることでしょう。

研究室での毎日は驚きと発見の連続です。新しい何かと出会うことで、人は成長していくのです。そして未来へとつながっていく力となっていくのです。

[森本 将弘 (学部3年)]

研究室紹介—File04

東洋史学研究室白書

研究室名：東洋史学研究室

こんにちは、東洋史学研究室です。東洋史学とは、中国・タイやインドなど、アジア全域について、関連する資料や文献を読み解きながら、そこから得た情報をもとに各国の歴史や制度、当時の社会情勢について理解を深め、解き明かしていく学問です。

研究室に配属されて1年目の2年生では、東洋史学を学んでいくうえで必須となる、東南アジアの地理や歴史についての概論や、中国における歴史観や主だった歴史史料、中国における独自の史料分類法などの基礎知識を学びます。選択によっては、タイ語を履修することもできます。

3年生からは、2年生の授業で身につけた基礎知識をもとに、演習や特殊研究の講義を行ないます。演習では、実際に白文そのままの状態の漢文である文献史料を自分で区切り、訓読や日本語訳をして解釈したうえで、その内容と関連する項目について参照しより深く理解したり、英語や中国語で書かれたアジアに関する論文を輪読し、論文中に登場する引用史料や用語について自分から史料にあたって調べ、それをふまえて要約したものをまとめて発表したりします。特殊研究では、時代区分のある部分に焦点を絞り、既存の研究を紹介しながらより詳しく学んだのち、自分の解釈をレポートにまとめます。

高校での世界史の中で、中国や東南アジアといった地域に興味があり、実際に史料を自分で活用して詳しく知りたいという方や、国語で学んだ漢文を原文からより深めて読んでいきたいという方におすすめです。

[尾西 真衣子 (学部3年)]



観音塘（雲南省大理市）、2009年撮影
現地の少数民族（白族）の仏教寺院

最近の文学部

後期試験期間中です

遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます。いまごろ高校3年生の皆様は、入試本番を間近に控えて勉強に励んでおられることかと思えます。文学部でも現在、後期の定期試験の真っ最中でして、今年は中央図書館が改修閉館中のため、空き教室のあちこちで、ノートを広げて試験勉強に勤しむ学生の姿を見掛けます。でもそれも来週まで。2月中旬以降、試験も終わって学生たちは長い長い春休みに入ります。（K記）